

人格が国語を凌駕する

美術評論家・多摩美術大学美術学部教授

さわらぎのい
榎木 野衣



国語で話すこと

国語というにはある意味、不思議な教科の名称であって、というのも、私は大学で講義を持つ者だけれども、すべての講義で国語を使って行っている。ということは、そのような条件下では、わざわざ国語と謳うまでもなく、すべての講義で国語力が試されていることになる。

ところで語学では「読み・書き」に加えて「話す・聞く」が重んじられるのが通例だが、国語でもそれは同様だろう。実際、講義では読むこと、書くことに先立つ大前提として、教授する側では話すこと、教授される側では聞くことが成り立っていないなければならない。その点では、教授される側だけでなく、教授する側でもつねに国語力が試されていることになる。

けれども、うまく話すということはたいへん難しい。私は今の大学に赴任してまもなく二十五年が経とうとしているけれども、講義でもっとも気を使うのは、同じ知識の伝授であつても、それをどのように話すかにある。というのも、限られた時間のなかで首尾よく聞くことを可能にするためには、機械的に話すのではだめで、必ず抑揚というか、一種のテンポ、リズム感のようなものが必要で、そうしたことについては過去に学校で習ってきた覚えがないのだ。

しかも話すというのは、技術のようであってそこに収まらない不確定な要素をたくさん持っている。例えばその日の体調、感情、気分、もつ

といえは季節、天気、時刻によっても少なからず左右されるところがある。なにせ人が話すのである。そのところはどうしても避けがたい。そこを一定に保つのがプロの教員、と言われるかもしれないが、逆にいえばどんな条件下でも同じように話せるような話しっぷりが聞き手にとつておもしろいはずがない。

私は講義を話芸のように捉えすぎだろうか。いや、そうは思わない。そもそも私は講義でその日の出来事や冗談のたぐいを挟むことが皆無だし、どちらかといえば一本調子であることが多い。しかしだからこそ、それをどうにか伝えるには話し方にかんがりの部分を負っていて、どうしても多少の工夫をせざるをえないのである。

ひとりになるには

それにしても、自分の専門分野を教えるのに、なぜそこまで四苦八苦するのだろうか。あらためて考えてみて、はたと気がついた。それは、自分が今の大学に呼ばれたのは、評論という文芸の分野で認められたからであつて、つまり文章を書くことに一日の長があつたというだけのことだ。決して話をすることに秀でていたからではない。それなのに、大学での仕事の大半を占める講義という形式では、それよりもずっとうまく話すことが求められているのだ。というより、言われてみれば自分でも実感するのだけれども、文章を書くことと、書いたことをうまく話して伝

えるのでは、なんというか——そもそも脳のなかで使っている部分がぜんぜん違うように思う。

文章を書くときに必要なのは、なによりもまず集中力だ。集中力というのは、言い換えれば一人になり切れる力、と言ってもいい。だいたい前のことになるが、文章を書く仕事を複数の人と共有していたことがあった。そういう場所では、書くこととは無縁ないろんな出来事が折り重なるように起こる。だから文章を書くにはとても不似合いな場所なのだけれども、さしたる支障を感じたことがなかった。ようは一人であるのと変わらなくらい集中することができればよい。ただしこれは周囲を無視するというとは違う。耳からは周囲の音が入ってきてはいても、気にならなくなる。むしろ適度にリラックスできる背景音のようなもので、集中力というのとはそういうことができるという能力なのだ。そういえば、今でも部屋に籠って一人で文章を書くときは、たいてい音楽を流している。書くための邪魔にならないのかとけっこう聞かれるのだが、不思議なもので、そのほうが集中できるのだ。むしろ、音楽はうまく一人になれるための材料になっているかもしれない。物理的に一人でいるからといって、書くために一人になり切れているとはかぎらない。一人になるためには、脳のなかでの一種の切り替えが必要なのだ。それが音楽ということだってある。言い換えれば、先に例に出したとおり、事務所のよ

うなどころにいても一人になることは可能だ。

これに対して、人の前で話をするためには、まったく違う能力が必要となる。なにがしかの集中力は必要だろうが、それは一人で文章を書くのとはまったく違っている。むしろ求められているのはコミュニケーション能力であって、一人になるのとは真逆なのだ。先の脳のなかで違う部分を使うことが求められる、ということを書いたのは、つまりはそういうことだ。文章を書くように集中して話すことは、むしろ聞かせるの存在を置き去りにしてしまう。つねに反応を見ながら、緩急をつけ、わかりやすく噛み砕きながら、テンポよく話すというのは、これはもうまったく別の才能と言っている。書くことに少しぐらい秀でていたくらいで、たくさんのお客様を前に、週に何コマも一回一時間半、一年では一コマだけで三十回も話をするというのは、思えばたいへんな飛躍なのだ。

還暦を迎えたら

だけれども、そういう能力は才能というよりも、結局は年月が解決してくれるもののように最近感じている。私は先日の誕生日で齢にして六十を数え、いわゆる還暦を迎えた。還暦というのは一巡して赤ちゃんに戻るといことらしいので、その意味では大台を迎えたことになると。はたしてよくできたもので、還暦を迎える少し前くらいから、一種のあきらめの精神とい

うか、話はあまりうまくできなくてもいい、というような気持ちが生まれてきた。すると不思議なことに、以前よりもずっとリラックスして話ができるようになったのだ。しかしながら、それ以前の四苦八苦とのあいだで、話している内容にさしたる違いはないのだから、これはやはり一種の境地の変化ということなのだろう。

思えば以前の私は話すことにあまりに集中しすぎていたように思う。文章を書くために必要な集中力が一人になることなのであれば、いっそ真逆を向いていたかもしれない。書くために必要なのが集中力なら、話すことに必要なのはリラックスだったと言ってもいい。なぜ書くために集中力が必要かといえば、自分のなかから別の自分を引っ張り出すためだった。

これに対して、話すことに求められているのは逆に素の人間、地の自分のようなものなのだと思う。私は還暦を迎えてようやくそのようなことに気づいた。というよりも、迎えなければ気が付かなかったのだろう。それを美術の世界で言われる「ヘタウマ」と呼んでもいい。ヘタウマが下手でも味わいがあるのは絵に人柄が表れているからだ。その意味で一種の文人画と呼べそうだ。しかし国語ではこのような境地については学べない。これはやはり身に着けるしかなく、多くの場合は時がそれを可能にする。結局、人格が国語を凌駕するとき、ようやくヘタウマに話ができるようになるのかもしれない。